

随 想

愛知淑徳に お世話になつて



愛知淑徳高校教諭(生活指導部長)
加藤繁武



平成元年、第14回全国選抜で初優勝。
生徒たちに胴上げされる

昭和43年に愛知淑徳にお世話になって、はや38年になります。

着任の年、ソフトテニス部の顧問ということで、新学期が始まらぬうちの3月より部活の指導にあたりました。随分張りきつて始めたようにお思いでしょうが、実はテニスは中学2年生から高校1年生の夏までの2年間しか経験がありませんでした。当時のキャプテンと乱打をするように顧問の山本先生から言われ、「女学生に負けてたまるか!」の思いで必死に打ち返したのを思い出します。また、大先輩である光岡先生に見せていただいた前衛の上げボールの見本を、今でも鮮明に覚えています。

思い出すのは、やはり昭和63年の「京都国体」での優勝です。すばらしい選手達に恵まれたにもかかわらず、インターハイな

どでは全国優勝がなかなかできず苦しみました。チームの最後の年に優勝できたことは人生最高の喜びでした。嬉しさのあまり思わず公衆電話に飛び込み、家内に電話して感謝した記憶があります。また、年明けの新メンバーで臨んだ全国選抜大会にも優勝することができました。地元開催のプレッシャーにも負けず、全国の並みいる強豪を押さえての優勝であったので、感激もひとしおでした。

これまでクラブ指導にあたって、本当に賢く素直な生徒に恵まれたと思つています。「考えさせること」「言われたことしかできない生徒は言われたこともできない」「1から10まで教えなければならぬ」といふ生徒は10までできない」を胸におき、今まで指導してきました。

3年目に中学1年3組を初めて担任し

た時、ふと授業中に背中に熱い視線を感じたことがあります。振り返ると二人の生徒が必死に授業に集中している。あの目をみた時、また学級日誌の教員所見欄にさりげなく書いた言葉に生徒が素直に反応することが分かった時、自分が関わることで生徒が大きく変わってゆく教育の恐ろしさを感じました。

友達からも親からも「お前が先生を、しかも女子校の先生をしているのは信じられない」と言われながらも何とか勤めてまいりました。自分の愛知淑徳での生活は、周りの方に大変お世話になっている気がしています。今年度から生活指導部長という大変な役を仰せつかり気が重いです。お世話になった愛知淑徳に少しでも力になればという思いで頑張つていきたい、そう決意を新たにする今日この頃です。